

南張貝塚（第4・5次）発掘調査報告

～志摩市浜島町南張～

2014（平成26）年2月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、三重県志摩市浜島町南張に所在する南張貝塚第4次および第5次の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、平成23・24年度県営中山間地域総合整備事業（志摩北中部地区）に伴い、記録保存を実施したものである。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
平成23年度（現地調査：第4次）　　調査研究1課　主幹　伊藤裕偉
平成24年度（現地調査：第5次）　　調査研究1課　主幹　伊藤裕偉　主査　星野浩行
平成25年度（報告書作成）　　調査研究1課　主幹　伊藤裕偉
- 4 調査にかかる諸費用は、執行委任を受けて三重県農林水産部が負担した。
- 5 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 6 当報告書の作成業務は当センター調査研究1課が行った。報告文の作成と編集は伊藤が行った。

凡　　例

<地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、三重県共有デジタル地図（平成19年調図）、これらの地図は、全て世界測地系（測地成果2000）に対応している。
- 2 2006年三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号：三総合地第93号）。
- 3 調査区は国土座標系での表示はしていない。挿図の方位は、工事図面から割り出した真北を示した。なお、磁針方位は西偏6°30'（平成10年）である。

<造構類>

- 4 現地土壤の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
- 5 当報告書での造構は、全体で通番としている。
- 6 造構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。
S D ……溝　S Z ……落ち込み・貝層

- 7 造構は、調査時に付加した造構番号を踏襲している。

<遺物類>

- 8 当報告での遺物実測図類は実物の1/4である。
- 9 実測図のうち、上下の外郭線（口縁部・底部など）に切り目を入れているものは、残存が少ない（1/12以下）が、既存事例に基づきおよその大きさを推測して示したものである。
- 10 当報告書での用語は、「わん」は「碗」に統一している。
- 11 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号……挿図掲載番号である。

実測番号……実測段階の登録番号である。

様・質……「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など……遺物の器種を示す。

造構・層名……遺物の出土した造構や層名を記した。

法量(cm)……遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(体)は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法の特徴……主な特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土……小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調……その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に掲げる。

残存度……指示部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項……遺物の特徴となるその他の事項を記した。

<写真図版>

- 12 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。

- 13 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本文目次

I 調査の契機・経過と行政的諸手続	(1)
1 調査の契機と協議経過	
2 発掘調査の経過と法的措置	
II 遺跡と周辺の諸環境	(5)
1 位置と地形	
2 歴史的環境	
III 調査区の成果～層位と遺情～	(10)
1 調査区の地形と層位	
2 各調査区の状況	
IV 調査の成果～出土遺物～	(13)
1 概要	
2 第4次調査区の遺物	
3 第5次調査区の遺物	
4 第5次調査区の貝殻	
V 調査のまとめと検討	(17)
1 遺跡としての南張貝塚	
2 南張地区の地形環境	
3 総括～南張貝塚の意義～	

挿図一覧

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 第1図 事業地内調査区位置図 | 第6図 黄灰細砂層の深度と砂堆の復元 |
| 第2図 南張城山城跡縄張り図 | 第7図 「南張村繪図」(近世前期) |
| 第3図 南張貝塚周辺の主要遺跡位置図 | 第8図 「志摩国英虞郡浜島村大字南張繪図」 |
| 第4図 調査区平面・土層断面図 | 第9図 近世段階の南張村状況想定図 |
| 第5図 出土遺物実測図 | 第10図 中世の南張地区景観復元概略図 |

表一覧

第1表 南張貝塚（第4・5次）遺構一覧

第2表 南張貝塚（第4・5次）出土遺物観察表

挿入写真一覧

- 写真1 事業地の状況
写真2 調査状況 (23-5区)
写真3 調査状況 (24-1区)

- 写真4 南張の風景
写真5 「五輪坊」の宝鏡印塔群
写真6 24-1区貝層 S 7出土の貝類

写真版一覧

- 写真版表紙 南張川と南張集落
写真版1 調査区 第4次 (23-1~4区)
写真版2 調査区 第4次 (23-5・6区)

- 写真版3 調査区 第5次 (24-1区)
写真版4 調査区 第5次 (24-2区)
写真版5 出土遺物

I 調査の契機・経過と行政的諸手続

1 調査の契機と協議経過

a 総説

ここで報告する南張貝塚は、県営中山間地域総合整備事業（志摩北中部地区）に伴い、平成23・24年度に発掘調査（記録保存）を実施したものである。事業主体は三重県農林水産部（農業基盤整備課）、実施機関は伊勢農林水産商工環境事務所（以下、伊勢農林）で、調査を三重県埋蔵文化財センター（以下、当センター）が実施した。

b 協議の経過

県営中山間地域総合整備事業（志摩北中部地区）は、農地や集落内の排水を目的とした排水管埋設工事である。南張集落地内は、集落内道路の下に埋管するものである。南張地区内の当該工事は平成18年度から継続している。

平成20～22年度には南張集落の北部を中心にこの事業が実施された。この事業と併行して、埋蔵文化財包廃地である南張貝塚は集落内全域に広がることが確認されている。この結果については、三重県埋蔵文化財センター編「南張貝塚（第1、2、3次）発掘調査報告」（2010年）にまとめられている。

平成23・24年度には、引き続き集落南部（つまり南張貝塚南部）にも当該事業が及ぶこととなった。そのため、当センターは伊勢農林と協議を重ねて、

遺跡該当部分の発掘調査を随時実施することとした。平成23年度が第4次調査、平成24年度が第5次調査にあたる。

第3次調査以前と同様、南張集落地内の狹隘な道路に管を敷設するというこの事業は、通常の発掘調査スタイルを取ることが極めて難しい状況であった。そのため、今回実施した第4・5次調査も、第3次調査以前と同様に工事立会形式で実施することになった。

第4次調査の方法については平成22年度末に、第5次調査の方法については平成23年度末から24年度初頭にかけて協議を重ねた。

2 発掘調査の経過と法的措置

a 調査の状況

【第4次調査】 前述のように、平成23年度の第4次調査は、第3次調査以前と同様な手法で実施した。これは、第3次調査と同様、1日の工事は埋設管1本分（4m）しか進行しないことと、狹隘な集落内道路を通行止めして調査・工事を進めることができることに起因する。そのため、事前に集落内の遺物散布状況を確認し、遺構・遺物が確認される可能性が高い地点を抽出して実施することとした。

第4次調査は、調査坑の冒頭に「23」を付加した。第4次調査に相当するのは、23-1区から23-7区まで



写真1 事業地の状況



写真2 調査状況（23-5区）



写真3 調査状況（24-1区）

の7地点で、最終調査面積は合計44m²であった。

【第5次調査】 平成24年度の第5次調査では、工事進捗に併せて立会を実施するというスタイルよりも確実な方法として、事前に範囲確認調査を実施し、その結果に基づき着工時に要調査部分の調査を実施するという方法を採った。範囲確認調査は、平成24年11月12日と同月19日の2日間に、合計18ヶ所で実施した。その結果、調査坑を配置した2ヶ所の地点で中世を中心とした出土遺物が良好に見られたため、その地点を中心とした約50m²については工事着工前に調査が必要として取り扱うこととなった。

調査対象地は24-1区および24-2区とし、平成25年1月22日に開始し、全ての調査をこの1日で終了した。最終調査面積は、24-1区が20m²、24-2区が14m²で、合計34m²である。

なお、発掘調査にあたっては、道路改良工事受注業者である戦部建設株式会社が土工部門の管理を行つた。

【調査経過】

・第4次調査

平成24年2月2日 23-1区立会。路面下約20~50cmに黒褐色砂を確認。遺物なし。

2月20日 23-2区立会。路面下15cmで黒褐色砂および黄灰色砂（ベース）を確認。中世後期の土師器・陶器が少量出土。

2月27日 23-3区立会。路面下約15~20cmで黒褐色砂確認。近世の陶器が出土。

3月12日 23-4区立会。路面下約15~88cmの間に褐色砂を確認。良好な埋土ながら中世後期の土師器片

少量のみ。

3月27日 23-5区立会。路面下20~35cmの間に暗赤褐色砂を確認。硬化している。遺物なし。

4月17日 23-6区立会。路面下85cmにて溝状遺構を確認。尾張型第6型式以降の山茶碗片が出土。

5月1日 23-7区立会。路面下約15cmで黄灰色砂（ベース）。遺物なし。

・第5次調査

平成24年11月12日 範囲確認調査（第1回）

11月19日 範囲確認調査（第2回）

平成25年1月22日 範囲確認調査結果に基づき、24-1区および24-2区を調査。24-1区で鎌倉時代を中心とした時期の土器類および貝殻を多量に確認。図面作成および写真撮影。同日に伊勢農林へ現地引き渡し、調査終了。

b 発掘調査の普及・公開

発掘調査が工事立会形式であったため、発掘調査後の現地説明会は開催できなかつた。調査成果の一部は、県公共事業にかかる発掘調査の成果報告会である「おもろいもん出ましたんやわ@三重2012」（平成25年3月9日に開催）で、当遺跡出土資料の展示を行つた。

c 文化財保護法等にかかる諸通知

発掘調査にかかる文化財保護法（以下、「法」）の諸通知は、以下により行われてゐる。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長あて県知事通知）

平成23年10月21日付、勢農第4066号

・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知（鳥羽警察署長あて県教育長通知）

平成25年2月15日付、教委第12-4433号

3 発掘調査と記録の方法

a 剥削の方法

南張貝塚第4・5次調査は、いずれも工事立会形式である。路面（アスファルト）からベースの黄灰色砂までの間（包含層を含む）は、基本的に重機で除去し、その後に遺構検出のための削り込みと遺構剥削を人力で行った。

b 地区設定

第4次調査区の調査区はいずれも狭いため、事業

地内の小地区割りは行わなかった。第5次調査区では、24-1区は西から5m毎にw1～w5とし、24-2区は南から5m毎にs1・s2とした。

c 遺構番号

第4・5次調査区で確認した遺構は少なかった。第3次調査以前に、遺構番号は「5」まで付与されている。そこで、第4・5次調査では「6」以降とした。

d 出土遺物の回収

出土遺物は、出土遺構と出土年月日を記載した専用のラベルを現地で付与した。また、小地区割りを行っていないため、遺構に伴わない遺物は出土地点がわかる表記を与えた。遺物類は当センターへ搬送し、洗浄などの作業を行った。

24-1区から出土した貝殻は、現地で選別のうえその一部を抽出した。

e 遺構図面

遺構検出段階で、略測図（遺構カード）を作成した。遺構が少なかったため、遺構カードはメモ的なものである。

発掘調査終了後に、調査区全体の実測図を作成した。調査区の平面図は1/100で作成した。調査区の土層図は1/50で作成した。第4次調査区と第5次調査区の24-1区については、土層図は柱状図とした。

f 遺構写真

遺構関連の写真に関しては、35mm版による白黒・スライド写真と、デジタルカメラによる撮影を行っている。

4 整理作業とその方法

a 遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

出土遺物は、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測図を作成した。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。報告書掲載遺物については、それぞれ1枚づつラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

出土遺物は、整理の結果をもとに、報告書掲載分および参考資料としての保管分（A遺物）と、報告書未掲載分（B遺物）とに区別して保管している。出土した貝殻は、参考資料としてA遺物と同様に保管した。

b 図版作成と遺物写真撮影

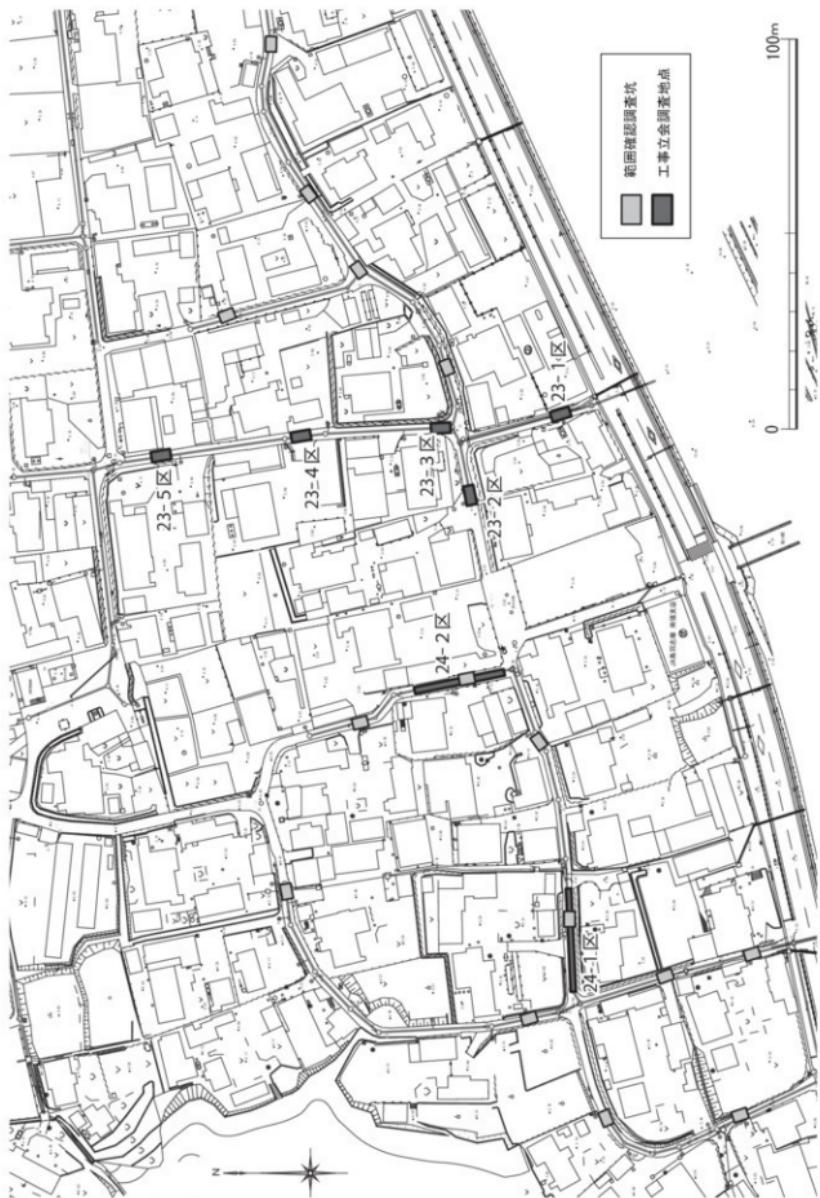
実測図等が完成した遺物類は、報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を6×7版（プローニー）で撮影した。遺物写真の撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

c 記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。



第1図 事業地内調査区位置図

II 遺跡と周辺の諸環境

1 位置と地形

南張貝塚は三重県志摩市浜島町南張にあり、現況集落部分を中心に広がる遺跡である。志摩半島の南西部にあたり、熊野灘に面している。南張の西方約3kmにある五ヶ所湾との間には、宿浦・田曾浦のある丘陵が岬状に突出している。当地の地形は新生代第四紀更新世の堆積土が隆起して形成された隆起海食台地で、その海岸線はリアス式海岸として著名である。小規模な谷状地形（溺れ谷）が深く入り込んでおり、農耕にはあまり適さないが、アオサの養殖や漁業が盛んである。

リアス式海岸の発達する当地であるが、このなかで、南張地区の前面は小さいながらも湾を形成し、南張集落はその最深部にある。そのため、南張地区には小規模な海岸平野が見られる。

南張集落は浜堤帯（砂堆）上に乗る集落で、海拔は3~4m程度である。集落の北側は、現在でこそ水田として利用されているが、おそらく近世以前は後背湿地（ラグーン）が広がっていたものと想定される。南張貝塚は、海とラグーンとの間に形成された砂丘上の遺跡とみることができる。

2 歴史的環境

南張地区を中心とした歴史的諸環境について、既存の調査や資料をもとに概観する。

a 古墳時代以前の南張周辺地域

旧石器時代の遺跡として、五ヶ所湾深部にあたるナゴサ遺跡⁽¹⁾（南伊勢町切原）・ヒロサキ遺跡⁽²⁾（同町船越）が著名である。この2遺跡からはナイフ形石器や尖頭器類が出土しており、熊野灘沿岸部に古くから人の活動がはじまっていたことが知られる。縄文時代の遺跡も、繩里中遺跡（南伊勢町縄浦）や、五ヶ所湾口に浮かぶ葛島の葛島遺跡（同町田曾浦）など、五ヶ所湾側に多く見られる。

弥生時代では、繩里中遺跡で前期から中期にかけての土器が採集されている。注目できるのは、中期の土器相に伊勢湾東岸部（尾張・三河）の影響が見



写真4 南張の風景（北から）

られることである⁽³⁾。海を通じた人々の交流が想起できる。

古墳時代前期初頭から後期にかけては、海浜部を中心に爆発的な遺跡増加が見られる。この傾向はとくに先志摩半島部に顕著である。御座白浜遺跡、大井の浜遺跡、地蔵遺跡（いずれも志摩市志摩町）など現在の波打ち際で多数確認されている⁽⁴⁾。遺跡立地として興味深いが、海食による遺跡消滅が危惧されている。この一方、古墳そのものに関しては、前期に相当するものは今のところ未確認である。

古墳時代中後期になると、志摩半島から熊野灘北岸部一体に古墳群の形成が顕著となる。志摩半島先端部では、泊古墳（全長約32m）・斎ヶ巣1号墳（全長約30m）などの前方後円墳がある。著名な志島11号墳（おじょか古墳）も、現在では墳形が不明だが前方後円墳であった可能性は高い。南張周辺でも、五ヶ所湾口部の半島先端に築かれた浅間山古墳は、全長約25mの前方後円墳と想定されている⁽⁵⁾。

また、古墳時代後期には、横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が、熊野灘を望む丘陵端部に多数造成されている。代表的なものに、浜島古墳群（県指定史跡）や縄浦古墳群（南伊勢町縄浦）などがある。とくに、縄浦古墳群に含まれる宮山古墳は6世紀末から7世紀前半にかけての古墳で、発掘調査によってその全貌が知られている。右片袖式の横穴式石室の内部からは、金銅装双童文素襯頭太刀、銅鏡とい

った優品とともに、多量の須恵器・鉄製武器類などが出土している^⑬。

宮山古墳の石室よりもさらに精巧な石室が日和山古墳である。開口しているため副葬品は不明であるが、石室の比較から見ても、宮山古墳に勝るとも劣らない副葬品を有していたと考えられる^⑭。つまり、穂浦古墳群は全体として極めて優秀な副葬品を伴う古墳群であったと考えられる。

熊野灘北岸部に見られる後期古墳の展開は、以上のように目を見張るものがある。ここからは、古墳時代前期以降の遺跡増加から推察される当地での人口増加、そこから垣間見られる豊富な海産物資源の確保、そして、それを縫として近畿中心部との活発な交流をここから伺うことができる。なお、海の生業に伴う可能性の高い興味深い資料として、追間浦道瀬遺跡（南伊勢町追間浦）から多数の碇器が出土している。魚介類等の採集・加工に使われたと考えられている^⑮。

b 古代・中世の南張周辺地域

律令期の当地は志摩国にある。古代志摩国は近世のそれよりも広く、現在の尾鷲市付近までの熊野灘沿岸部を含んでいた。「倭名類纂抄」記載の郡郷では、南張地区付近は志摩国英虞郡名錐郷ないしは船越郷に相当すると考えられる^⑯。

この時期の遺跡はあまり明確ではないが、前出の追間浦道瀬遺跡からは和同開亦や灰釉陶器が、隣接するコタロ遺跡（追間浦）からは銅製帶金具が出土している^⑰。志摩半島先端部の贋遺跡（鳥羽市）で多数の銅製・石製の帯装飾具が出土していることを踏まえれば、律令官人層が熊野灘北岸部に深く関与していたことが見て取れる。この背景には、平城京木簡で多款確認されているように、調として貢納される志摩国の海産物があるのだろう。

また、アラス式海岸による複雑な入り海を擁する特性を活かし、古代から中世にかけての熊野灘沿岸部では舟運が盛んに営まれていたと推察できる。

中世の遺跡としては、南張貝塚のほか、前出のヒロサキ遺跡・追間浦道瀬遺跡などから土器類の出土が知られる。ただ、地形的な制約や発掘調査面積の少なさから、大規模な遺跡は未だ確認されてない。

戦国末期の舟運では、宮川河口部の大湊に入船し

た船に「はま嶋かもん」^⑱の名が見える。南張の東方にあたる浜島地区との関係が想定できる。この地の近隣では、波切・布施田などの地名を聞いた船主の名も見える^⑲ので、熊野灘北岸部から先志摩半島一帯では、当時の中核的湊津である大湊を中心とした活発な舟運活動が展開していたとみられる。

戦国期を含む中世後期には、当地にも領主層の発達が見られる。とくに五ヶ所浦（南伊勢町）は、愛洲（五ヶ所）氏が拠点としていた。愛洲氏は室町期の一時期に伊勢守護代ともなっており、伊勢南部を領域支配した北畠氏の有力被官であった^⑳。愛洲氏の出自は紀伊国南部といい、熊野灘から伊勢湾にかけての水運に影響を及ぼしたと考えられる。

この時期の城館として、五ヶ所城跡、浜島城跡、田曾城跡などがある。南張地区的南東にある「城山」にも城郭が築かれていた（南張城山城跡、後述）。このうち、田曾城跡は国道改良工事に伴う発掘調査が実施され、15世紀初頭から16世紀前半頃にかけての土墨・堀切のほか、瀬戸・常滑陶器類や南伊勢系土器類などが良好に出土している^㉑。

これら領主層に深く関わる遺物として、石塔類がある。とくに五ヶ所浦沿岸部では、南北朝末期から室町期にかけての宝篋印塔が注目できる。下津浦字エボシ（南伊勢町）の五ヶ所浦に面した岬の上には「五輪坊」と呼ばれる場所がある。ここには丘陵端部に5基、近くの祠内に2基、合計7基の宝篋印塔が見られる。五ヶ所城跡（前出）の南麓近くには愛洲氏墓塔群があり、ここには宝篋印塔のほか、五輪塔・石仏などが見られる。これらの石造物は硬質砂



写真5 「五輪坊」の宝篋印塔群

岩製のものが多く、伊勢湾沿岸部（とくに美濃方面）との関わりを見いだしていくことができる可能性を秘めている。

この一方、太平洋に面した当地には、大規模地震による津波被害も見られたと考えられる。同時代史料ではないが、江戸時代の寛保年中に筆写されたとされる「塩屋地下文書」（志摩市浜島町）には、明応7（1598）年6月11日（旧暦）に発生した大地震（明応地震）に伴う被災が記されている。そこには塩屋地内にあった塩窯や塩浜が大破したという記載があるという¹⁰³。当地では、豊かな海の生業と、過酷な危険とが織り合はせであったといえよう。

d 中世の奈波利御厨

さて、中世の南張地区に関連すると考えられるのが、奈波利御厨である。奈波利御厨の成立時期と契機は不明だが、正安6（1304）年頃の史料に、後堀河天皇の皇女であった室町院（正安2年没）の遺領として見える¹⁰⁴ため、遅くとも13世紀後半以前には成立している。ただし、この史料で奈波利御厨は「伊勢国」として登場するため、やや注意が必要である。

14世紀初頭前に成立したと見なされる、神宮祭主免給文書を集めて様式集とした「公文筆海抄」¹⁰⁵にも「奈波利」が登場する。この史料には祭主によって補任される役職と俸給（任料）が記されており、そこに「奈波里検校一足」とある。この「奈波里」が前出の「奈波利御厨」と一連のものとすれば、「奈波里」には宦官として神宮から検校が補任されていたことになる。この場合、神宮は在地で支配を行う領家職としての立場となろう。

15世紀後半に形の整った『神鳳鈔』¹⁰⁶には奈波利御厨の名が見える¹⁰⁷。室町院領奈波利御厨と神宮領奈波利御厨とが同一であると決めつけることはできないが、前述の推察が正しいとすれば、院領（皇室領）莊園のひとつである奈波利御厨の領家職が、神宮（外宮）領として継続認識されていた、ということ

にならう。ただ、院領（皇室領）としての奈波利御厨は前出史料のみで、その後の実態は全く不明である。

e 城山城跡（南張城山城跡）

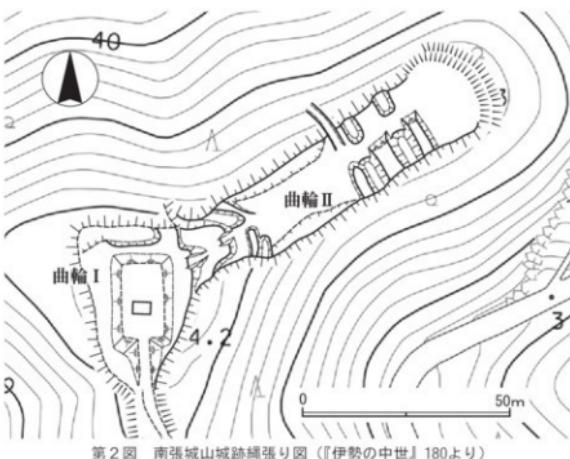
南張地区の南東部にある丘陵には城館遺跡がある。この城跡に関する報告はこれまでほとんどなされていないため、ここで概要を記す¹⁰⁸。なお、この城は埋蔵文化財包蔵地としては「城山城跡」という名称だが、「城山」という地名・呼び名は各地にあり混亂するので、ここでは「南張城山城跡」と呼称する。

南張城山城跡は、南張集落の南東にある標高約64mの丘陵上にある。集落と「城山」丘陵との間には南張川が流れている。丘陵の北麓には「城ノ腰」の小字がある。

城跡は、丘陵頂部の110m×20mの範囲に、数条の堀と土塁および削平段を設けるという構成である。曲輪は大きく2箇所（曲輪I・II）に分かれる。

西側の曲輪Iは貯水槽跡地で、その後の公園整備に伴う東屋と、その整地と見られる方形壇・通路がある。後世の改変が激しい。曲輪Iの東側には削平段が2段あり、浅い堀と土塁を伴っているので虎口に相当すると考えられる。

曲輪Iの東に広がる曲輪IIでは、土塁と堀とが交互に造作されている。堀は2条で南北に貫通せず、中央は幅の広い通路状となっている。土塁は3条で



第2図 南張城山城跡縄張り図（『伊勢の中世』180より）

南側斜面部にのみ見られ、堀を挟むように造作されている。土壘は1.5~2 m強、堀は1.5~2 mほどで、いずれも立派なものである。

南張城山城跡でとくに注目できるのは、曲輪Ⅱの東部に設けられた土壘と堀である。城郭東部に集中する。城内の導線も、曲輪Ⅰの虎口が東向きあり、東側への強い意識がある。城郭東部の丘陵裾に残る、「城ノ腰」の小字とも関係すると考えられる。

e 近世の南張地区周辺

『浜島町史』によると、近世初頭頃の当地は「名張村」と記され、寛文年間頃（17世紀後半）には南張村という記載がはじまるとされる（以下「南張村」で統一する）。近世の南張村は鳥羽藩領として位置づけられた。東隣の宿村・田曾村は紀州藩領なので、南張村は藩領境の村ということになる。

近世でも漁業は盛んで、南張集落南東の「おばべた山」の前浜での漁に関して、17世紀代には隣の浜島村と激しい争議が繰り広げられている。

近世南張村の中心は、現在とほぼ同じ場所であったと考えられる。近世集落の原型は、おそらくは戦国期頃に求められると考えられる。

【註】

- (1)南勢町教育委員会『ナゴサ遺跡発掘調査報告』(1976年)
- (2)関西大学考古学部古学研究室編『紀伊半島の文化史的研究』(考古学編、1992年) 所収、「ヒロサキ遺跡の調査」
- (3)前掲註(2)文献所収、「穢浦里遺跡出土遺物」
- (4)竹内正弘・伊藤裕像「先志摩半島の考古資料～志摩市立御座小学校所蔵資料を中心に～」(『三重県史研究』第21号三重県 2006年3月)

- (5)前掲註(2)文献所収、「浅間山古墳の調査」
- (6)前掲註(2)文献所収、「宮山古墳の調査」
- (7)前掲註(2)文献所収、「日和山古墳の調査」
- (8)南勢町教育委員会・南山大学人類学研究所「追間浦道源遺跡」(1976年)
- (9)京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』(1968年、臨川書店)
- (10)前掲註(8)文献
- (11)永禄八年十一月九日付、「船々衆鉄帳」(『大倭古文書』『三重県史』資料編中世2)
- (12)天正元年十月十五日付、「出裁之船数之分」(『大倭古文書』『三重県史』資料編中世2)
- (13)中世古群道『伊勢愛洲氏の研究』(三重郷土資料刊行会、1975年)
- (14)三重県教育委員会『田曾城跡発掘調査報告』(1986年)
- (15)『塩屋地下文書』(『浜島町史』1989年、p52・53)
- (16)『鎌倉遺文』21307
- (17)『公文筆海抄』(『三重県史』資料編中世1 (上), p1197~1199)
- (18)『神風鈔』(皇學館大学編『神宮古典籍影印叢刊6 神宮神領記』八木書店、1983年)
- (19)このことについて、浜島町編『浜島町史』(1989年)では、「外宮神領目録」に「奈波利御厨」が記載されているとしているが、『続々群書類從』第一所収「外宮神領目録」や、類史料の「諸国御厨御薦帳」(前掲註(18)文献)にも「奈波利御厨」の名は見えない。
- (20)伊藤裕像「志摩市浜島町南張・南張城山城跡の調査」(『伊勢の中世』第180号、伊勢中世史研究会、2013年)

【参考文献】

- ・平松令三監修「三重県の地名」日本歴史地名体系第24巻(平凡社、1983年)
- ・浜島町『浜島町史』(1989年)
- ・南勢町『南勢町誌』(1985年)



第3図 南張貝塚周辺の主要遺跡位置図

III 調査の成果～層位と遺構

1 調査区の地形と層位

a 調査地の地形

調査地は、志摩市浜島町南張地区を通る道路（集落道路）内にある。南張集落の南部は、南張川と砂州（南張海岸・南張海浜公園）を隔てて熊野灘にあたり、その距離は100m程度である。

南張集落は、河川（湯川・南張川）と海との影響によって形成された砂堆（浜堤帶）の上にあたる。標高は、最も高いところで5.5m程度、低いところで3.5mほどである。

b 調査区の基本層位

当地の層位を、個々の調査区で確認した基本土層図によって観察する（第4図）。基本層序は、第Ⅰ層；整地土（アスファルト・碎石など、第4図1層）、第Ⅱ層；盛土ないしは現代擾乱土（同図第2層）、第Ⅲ層；褐～黒褐色系細砂（同図第3・4層）、第Ⅳ層；黄褐色系細砂（同図第5層）、第Ⅴ層が遺構基盤土となる。遺構基盤土は極めて均質な細砂層で、砂堆を構成する海成砂と考えられる。

第Ⅲ層は遺物を含む層である。含まれる遺物は中世前期のものを中心とする。遺物の含有状況は場所によって異なっている。このため、この層全体が遺物包含層に相当するわけではない。

調査区対象エリアを南北方向（海と直行方向）で見ると、第Ⅳ層には起伏が見られる。これは、上部に堆積する第Ⅲ層の厚みにも影響を及ぼしている。第Ⅳ層が低くなる地点は砂堆間に形成された後背湿地に相当すると考えられる（第V章参照）。

2 各調査区の状況

a 概況

調査区が集落道路に相当するため、既存の埋設管による搅乱が数多く見られた。そのためか、調査区内で確認した遺構は少ない。確認された遺構の多くが中世のものと考えられる。

なお、調査区のある集落道路は、隣接する屋敷地よりも一段（1m前後）高いもの多かった。しか

し、遺構面は隣接屋敷地の地面よりも高い位置で確認できた。このことは、集落道路部分が原地形で、屋敷地部分は主に削平によって造成されていることを示していると見られる。

以下、調査区ごとの状況を見ていく。調査区の位置は、第1図を参照されたい。また、確認した個々の遺構は第1表に一覧でまとめてるので、併せて参照されたい。

b 第4次調査区の状況

23-1区

調査区は、東西約2m、南北約4mの方形である。路面下約35cmで灰白色細砂層にあたった。遺構・遺物は確認できなかった。

23-2区

調査区は、2m×2mの方形である。路面下約20cmで褐色砂、同約50cmで灰白色細砂層にあたった。遺構は確認できなかったが、中世後期（15～16世紀）の土師器片・陶器片が出土した。

23-3区

調査区は、東西約2m、南北約3mの方形である。路面下約15cmで褐色砂、同約20cmで灰白色細砂層にあたった。褐色砂層の小規模な落ち込みが見られたが、遺構ではないと考えられる。出土遺物としては、近世（18世紀代）の陶器片が少量出土したに止まる。

23-4区

調査区は、東西約2m、南北約3mの方形である。路面下約25cmで褐色砂、同約90cmで黄灰色細砂層にあたった。褐色砂が比較的厚く確認できたといえる。遺構は確認できなかったが、中世後期（15～16世紀）の土師器片・陶器片が出土した。

23-5区

調査区は、東西約2m、南北約4mの方形である。路面下約20cmで褐色砂、同約35cmで黄灰色細砂層にあたった。黄灰色細砂層は、路面下10cm程度まで確認したが、大きな変化は見られなかった。褐色砂層は硬化しており、アスファルト舗装前に何らかの生活痕が見える地点であった。ただし、遺構・遺物は確認できなかった。

23-6区

調査区は、東西約1m、南北約8mの方形である。今回の調査区では最も北部にあたる。路面下約20cmで褐色砂、同約85~110cmで黄灰色細砂層にあたつた。ここでも褐色砂層の堆積は厚いといえる。

東西方向の構S D 6が確認できた。構は、幅約1.2m、深さ約80cmのしっかりしたものである。出土遺物は少ないが、13世紀代の陶器碗（山茶碗）が少量出土した。

23-7区

調査区は、東西約4m、南北約1mの方形である。路面下約20cmで黄灰色細砂層にあたつた。遺構・遺物は確認できなかつたが、調査区周辺で近世の尾張産土器焼成と陶器甕（常滑）片を採集した。

c 第5次調査区の状況

24-1区

調査区は、東西方向に約25m、幅は約80cmの線状である。路面下約10cmで黒褐色砂、同約40cmで黄灰色細砂層にあたつた。

褐色砂は、調査区西端から6~10mの間で、その層の上面に多量の貝殻と土器類を含んでいる。貝層の厚さは、厚いところで約20cmである。遺物の状況から、この部分は貝塚に相当するものと考えられる

(S Z 7)。貝殻にはサザエ・アワビなどを中心に、様々なものが見られる。出土土器は平安時代末から鎌倉時代前期にかけてのものが集中する。一部戦国期のものを含んでいたが、これは別遺構の重複を調査担当者が認識できなかつたものと判断すべきものである。

S Z 7以外の遺構は明確に認められなかつた。

24-2区

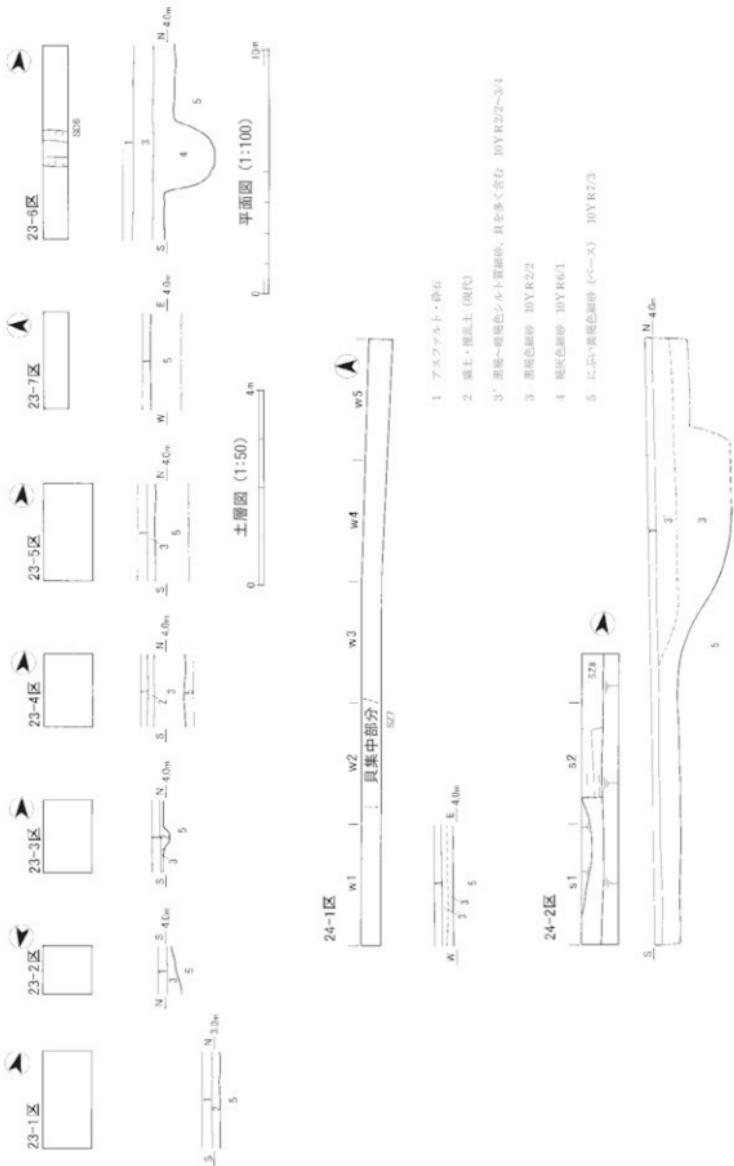
調査区は、南北方向に約12m、幅は約1.2mの線状である。路面下約20cmで黒褐色砂層にあたる。黒褐色細砂層は、北部ではその上面に貝殻が集中して見られた。ただし、24-1区S Z 7ほどの集中は見せない。この層からは、中世後期(16世紀代)に相当する土器類が少量認められた。

黄灰色細砂層は、調査区南部では路面下約50cmで確認できるものの、調査区南端から6m程度北のあたりから下降はじめ、最深部では路面下140cmとなつた。つまり、調査区北部は全体として大きな落ち込み地形を呈していることになる。

この落ち込み(S Z 8)直上には少ないながらも貝殻が認められた。また、鎌倉時代前期(13世紀)の陶器碗片が少量出土している。

第1表 南張貝塚（第4・5次）遺構一覧

遺構番号	性 格	調査区	時期	特徴・形狀・計測数値など
S D 6	構	23-6区	中世II a以降	幅約1.2m、深さ約0.8m
S Z 7	貝層	24-1区	中世II a以降	厚さ約20cm 土器類は中世前期中心 貝殻はサザエ・アワビ・カキ・ハマグリなど
S Z 8	落ち込み	24-2区	中世II a以降	砂堆後背湿地の端部か 計測深度約140cm 上部に貝層



第4図 調査区平面・土層断面図

IV 調査の成果～出土遺物～

1 概要

南張貝塚第4・5次調査で出土した遺物は、整理箱に2箱（約9.0kg）である。内訳は、中世の土師器・陶器類、近世の土師器・陶器・磁器類のほか、中世の貝殻（24-1区）から、アワビ・サザエなどの貝殻類が多量に出土している。

実測図を第5図に示した。図示した遺物の出土地点や詳細については、出土遺物観察表（第2表）を参照されたい。

2 第4次調査区の遺物

第4次調査区からの出土遺物は少ない。室町戦国期の土師器・陶器がある。

23-7区出土遺物（41・42） 41は土師器鍋。比較的硬質の焼成で、口縁上端に鋭利な面を持つ。尾張産の内耳鍋と考えられ、内耳部分以外の破片である。17世紀後半頃のもの⁽¹⁾と考えられる。

42は陶器の大甕。常滑産のもので、外面に自然釉が付着する。いわゆる「N」字状口縁が退化した形態で、口縁部内面は内側に突出し、口縁部外面の縁帶は突出を持たず頸部と同化している。中野晴久氏による常滑編年の12型式⁽²⁾に相当し、16世紀後葉頃のものと考えられる。

3 第5次調査区の遺物

第5次調査区では、24-1区を中心に比較的多くの遺物が出土した。また、人工物ではないが、24-1区から出土した大量の貝殻が注目できる。

24-1区出土遺物（1～29） 24-1区出土の遺物には、外面にカルシウム分の付着したものが多い。おそらく、これらの土器類は後述の貝殻と共に廻棄されたため、経年変化により貝殻から溶け出したカルシウム成分が周辺の土を巻き込み、土器の表面に付着したものと考えられる。

1は土師質土器の皿。ロクロ（回転台）整形によるもので、底部にはロクロ右回転の糸切り痕が見られる。

2～20は陶器碗類で、いわゆる山茶碗に相当する。2・3は小皿。3は尾張産（知多・猿投）で、4は三河産（渥美）である。4～20は碗。10は尾張産で、それ以外は三河産である。いずれも内面見込みを研磨されたものが多く、20のみ研磨が見られない。これらは、藤澤良祐氏による山茶碗編年の尾張型第5～6型式⁽³⁾に併行するものである。

21は陶器壺の頸部片で、知多半島産である。13世紀代のものと考えられる。

22～25は土師器鍋。いずれも南伊勢系のもの。22は第1段階a、その他は第1段階bに相当し、南伊勢中世II-a期に相当する⁽⁴⁾。26も土師器鍋で、尾張産の内耳鍋である。室町期のものと考えられる。

27・28は製塩用土釜の破片。焼成は軟質で、非常に脆い。素地中に粗穀やスサを含む。27には成形時の擬口縁がある。三重県内の平安時代遺跡で出土する、「志摩式製塩土器」⁽⁵⁾と呼ばれているものに類似し、その大型品のような形態を呈するものと考えられる。29は土錐で土師質である。

24-2区出土遺物（30～40） 30～32は南伊勢系の鍋。30は小形で、把手付鍋になる可能性がある。31は第4段階eに相当し、16世紀後半頃のものである。33は近世の尾張産熔炉で、19世紀頃のもの⁽⁶⁾。

34は陶器練鉢で、常滑産のもの。口縁端部は完全に摩滅しており、内面の摩滅も激しい。かなり硬質なものを碎く作業を繰り返し行った結果と考えられる。35は陶器鉢で、瀬戸大窯期のもの。34に比べて、摩滅は少ない。34・35は、いずれも16世紀代のものに相当する。

36は製塩用土釜の破片で、27・28と同様のものである。37・38は土錐で、いずれも土師質である。

39・40は近世の国産磁器碗。39は丸碗で、外面には丸文内に斜格子をあしらった意匠を4方向に配する。内面見込みには何かの文様がある。肥前産と考えられ、18世紀頃のものであろう⁽⁷⁾。40は端反碗で、外面は縦線と波瀾状の文様がある。内面見込みには何かの文様がある。素地の状態から瀬戸美濃産と考えられ、18世紀代のものであろう。

4 第5次調査区の貝殻

24-1区の貝層 S Z 7 からは、12世紀後半から13世紀前半頃の遺物とともに、多くの貝殻が出土した⁽⁶⁾。

貝層から出土した貝殻には、メガイアワビ、クロアワビ、ボウシュウボラ、チョウセンハマグリ、サトウガイのほか、トコブシや小形巻き貝などがある。また、サザエも多く出土し、大形のものが多い。このうち、メガイアワビには人工的に開けたと考えられる穿孔がある（写真6）。

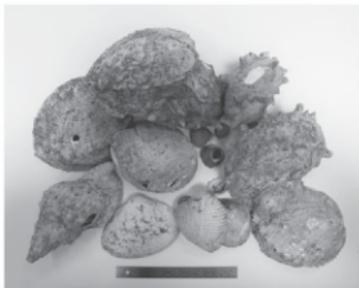
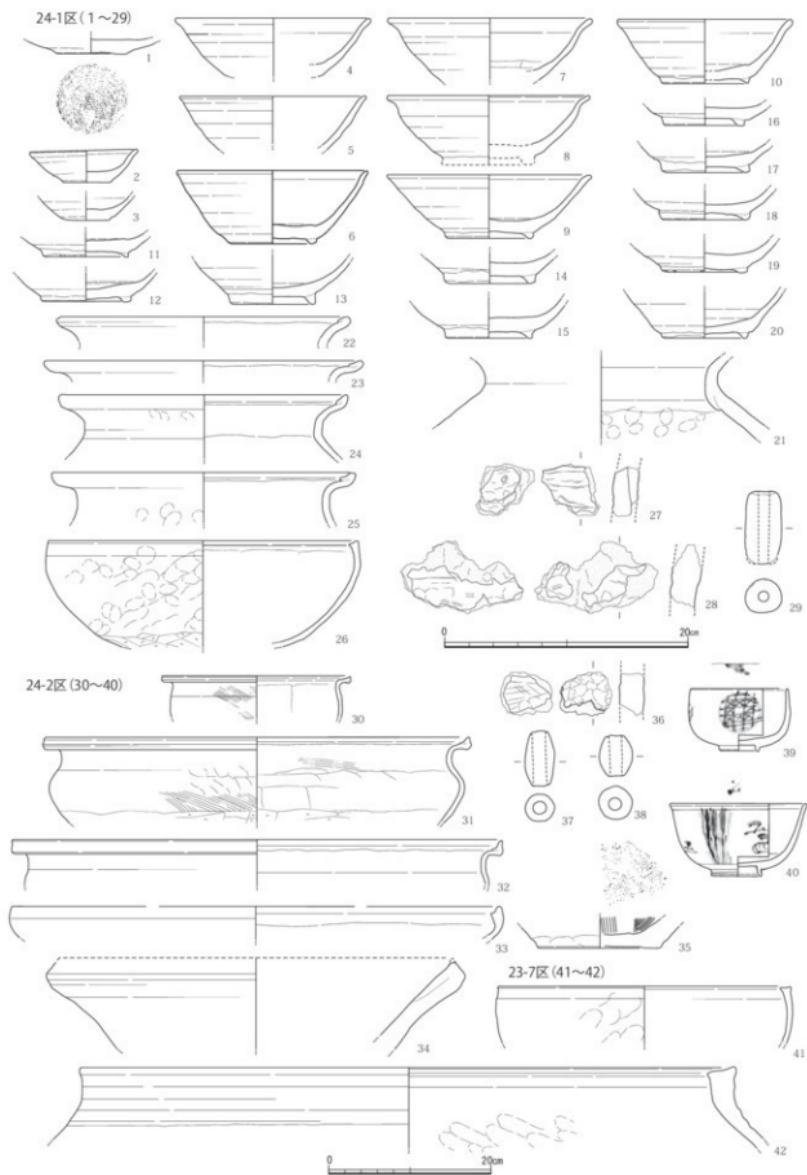


写真6 24-1区貝層S Z 7出土の貝類

これらの貝類には、メガイアワビ・ボウシュウボラをはじめとして、水深5～10mほどの比較的深い位置で生息するものが含まれている。人工的な穿孔が見られること、土器類と共に出土していることなどから、打ち上げられた貝殻ではなく、漁撈によって採集され、当地で加工されたものと考えられる。

【註】

- (1)鈴木正貴「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム、1996年）
- (2)中野晴久ほか『愛知県史』別編産業3中世・近世常滑系（2012年）
- (3)藤澤良祐ほか『愛知県史』別編産業2中世・近世瀬戸系（2007年）
- (4)伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」（『三重県史』資料編考古2、2008年）
- (5)新田洋「三重県における製塙に関する予察(1)」（『三重考古』第3号、三重考古学研究会、1980年）、山本雅靖「志摩式製塙土器考」（『考古学論集』考古学を学ぶ会、1990年）ほか。
- (6)金子健一「尾張出土のホウロクについて」（『研究紀要』第4輯、（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、1996年）
- (7)九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』（2000年）
- (8)出土した貝類の分類については、中野環氏（三重県教育委員会）のご教示を得た。



第5図 出土遺物実測図 (42は1:6、他は1:4)

第2表 南張貝塚（第4・5次）出土遺物觀察表

番号	出土地	種類	器種等	記載	遺物・器名等	高さ(cm)	調整・找法の特徴	出土	色調	内存度	特記事項
1	2-7	土師質土器	盆	24.5cm	S.Z.7 黒褐胎	(底)13.8	内・コロナリテ・系切り	直	10307.3	にじ・黒地	透12/12
2	2-5	陶器	小皿	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)15.8 (底)13.8	内・コロナリテ・系切り	直	2.317.1	灰白	透12/12 底12/12 底灰 内面研磨
3	2-6	陶器	小皿	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)13.8	内・コロナリテ・系切り	直	317.1	灰白	透9/12 知多・猿井 内面研磨
4	4-1	陶器	瓶	3.0 24.5cm (底)16.4	S.Z.7 黑褐胎	(底)16.0	内・コロナリテ 内・コロナリテ	直	317.1	灰白	透6/12 透美
5	1-7	陶器	瓶	5.0 (山葉地)	S.Z.7 黑褐胎	(底)15.2	内・コロナリテ 内・コロナリテ	直	317.1	灰白	透6/12 透美
6	1-1	陶器	瓶	5.0 (山葉地)	S.Z.7 黑褐胎	(底)15.6 (底)16.0	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	2.317.1	灰白	透6/12 透12/12 底灰12/12 底灰 内面研磨 瓶に剥落痕
7	4-2	陶器	瓶	5.0 24.5cm (底)16.4	S.Z.7 黑褐胎	(底)16.7	内・コロナリテ 内・コロナリテ	直	316.7	オーラーブ	透6/12 透美
8	4-2	陶器	瓶	5.0 24.5cm (底)16.4	S.Z.7 黑褐胎	(底)16.0	内・コロナリテ 内・コロナリテ	直	317.1	灰白	透6/12 透美
9	1-2	陶器	瓶	5.0 (山葉地)	S.Z.7 黑褐胎	(底)16.7 (底)16.2	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	317.1	灰白	透6/12 透12/12 底灰12/12 底灰 内面研磨
10	1-2	陶器	瓶	5.0 (山葉地)	S.Z.7 黑褐胎	(底)14.4 (底)15.2	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	2.317.1	灰白	透6/12 透12/12 底灰12/12 底灰 内面研磨
11	2-4	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.0	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	2.316.7	灰白	透12/12 透美 内面研磨
12	2-2	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.4	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	316.1	灰	透7/12 透美 内面研磨(B)
13	2-2	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.0	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	317.2	灰白	透12/12 透美 内面研磨
14	1-4	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.4	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	317.1	灰白	透12/12 透美 内面研磨
15	2-1	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.2	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	2.317.2	灰白	透12/12 透美 内面研磨
16	4-5	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)16.6	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	317.0	灰白	透10/12 透美 内面研磨
17	1-6	陶器	瓶	5.0 (山葉地)	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.2	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	2.317.1	灰白	透12/12 透美 内面研磨
18	4-1	陶器	瓶	5.0 24.5cm (底)16.4	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.2	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	2.316.1	灰白	透12/12 透美 内面研磨
19	4-6	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.0	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	317.1	灰白	透12/12 透美 高台に剥落痕 内面研磨
20	1-5	陶器	瓶	5.0 (山葉地)	S.Z.7 黑褐胎	(底)17.0	内・コロナリテ・系切り・貼付高台・ヨコナギ 内・コロナリテ	直	2.316.2	灰白	透5/12 透美 内面研磨ナシ
21	3-2	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)19.0	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギコナギ	直	7.206.6	桃	透5/12 透1037.3 にじ・黒地 透部屋ナシ 多方面に自然隙
22	3-2	土師器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)24.0	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・コナギ	直	2.316.2	灰白	透5/12 透伊勢系
23	3-1	土師器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)24.0	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・コナギ	直	2.316.2	灰白	透5/12 透伊勢系
24	5-3	土師器	瓶	5.0 24.5cm (底)16.4	S.Z.7 黑褐胎	(底)23.0	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	1037.2	黄橙	透5/12 透伊勢系
25	5-2	土師器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)23.0	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	2.316.2	灰白	透5/12 透伊勢系 外面に剥落痕
26	5-1	土師器	瓶	5.0 24.5cm (底)16.4	S.Z.7 黑褐胎	(底)23.0	内・ナ・ナ・ナコナギコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	1037.3	黄橙	透5/12 内輪、尾輪系
27	3-5	土師器	土釜	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)21.1	外・板工法によるナゲ 内・ナ・ナ・ナコナギ	粗	1036.6	桜	透5/12 透伊勢系 小形輪、把手付輪
28	3-4	土師器	土釜	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)20.3	外・板工法によるナゲ 内・ナ・ナ・ナコナギ	粗	1036.4	にじ・桜	透5/12 透伊勢系
29	2-4	土師器	土釜	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)19.1 (底)19.0	内・ナ・ナ・ナ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	2.317.3	灰白	透部屋の一部 表面に剥離感あり
30	6-2	土師器	瓶	5.0 24.5cm (底)16.4	S.Z.7 黑褐胎	(底)19.6	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	2.317.2	灰白	透5/12 透伊勢系 小形輪把手付輪
31	6-2	土師器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)19.5	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	1036.3	にじ・黄橙	透5/12 透伊勢系
32	6-4	土師器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)19.6	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	2.316.2	灰白	透5/12 透伊勢系 外面に剥
33	6-1	土師器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)19.6	内・ナ・ナ・ナ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	315.6	明赤桃	透5/12 透伊勢系
34	7-1	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)24.0	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	7.206.4	にじ・桜	透5/12 透伊勢系 よる夢城跡裏
35	7-2	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)16.1	内・ナ・ナ・ナコナギ・系切り・貼付 内・ナ・ナ・ナコナギ・貼付(10cm・2.0cm)・貼付	直	1036.3	灰白	透5/12 透1036.0 贴付(10cm)
36	6-5	土師器	土釜	5.0 24.5cm	S.Z.8 黑褐胎	(底)12.0	内・板工法によるナゲ 内・ナ・ナ・ナコナギ	粗	7.206.6	桜	透5/12 透伊勢系
37	5-4	土師器	土釜	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)12.4 (底)12.4	内・ナ・ナ・ナ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	316.6	にじ・桜	透部屋の一部 内輪大輪
38	5-5	土師器	土釜	5.0 24.5cm	S.Z.7 黑褐胎	(底)12.4 (底)12.4	内・ナ・ナ・ナ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	2.317.4	灰白	透部屋の一部 内輪大輪 重さ 19.3g
39	7-4	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.8 黑褐胎	(底)15.1	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	1036.3	灰白	透5/12 透伊勢系
40	7-3	陶器	瓶	5.0 24.5cm	S.Z.8 黑褐胎	(底)15.3	内・ナ・ナ・ナコナギ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	1036.3	灰白	透5/12 透伊勢系
41	7-5	土師器	瓶	4.0 23.7cm	灰白	(底)12.4	内・ナ・ナ・ナ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	1037.3	にじ・黄橙	透5/12 透伊勢系
42	8-1	陶器	大甕	4.0 23.7cm	灰白	(底)10.0	内・ナ・ナ・ナ 内・ナ・ナ・ナコナギ	直	1035.1	黄	透5/12 透伊勢系

V 調査のまとめと検討

南張集落のはば全域に広がる南張貝塚の発掘調査は、今回の報告を含めて5次にわたっている。次数は多いが発掘調査面積は決して広くなく、点と線による発掘調査区の累積である。しかしながら、結果的に南張集落の全体を見ることになったため、通常の発掘調査では得られないような情報も得ることができた。

ここでは、今回の調査によって得た成果と今後の課題などについてまとめておく。

1 遺跡としての南張貝塚

a 遺構

今回の発掘調査では、平安時代末期から鎌倉時代前期を中心に、一部室町時代・江戸時代に至る遺構・遺物が確認できた。ただし、明確な遺構は貝層、溝1条、落ち込み地形などが確認できたに止まり、建物遺構などは見いだせなかった。発掘調査範囲の狭さにも起因しようが、集落内部の詳細については今後の課題と言わざるを得ない。

遺構のなかで注目できるのは、24-1区で確認した貝層S Z 7である。ここからは鎌倉時代前期を中心とした土器類とともに、多量の貝殻が出土した。土器類が混在した貝層の確認により、当遺跡がまさに「貝塚」の名に相応しいものと言えうことができる。

この貝層から見つかった貝類は、メガイアワビ・クロアワビ・ボウシュウボラ・チョウセンハマグリ・サトウガイ・サザエなど多種多様である。このうち、メガイアワビ・ボウシュウボラ・チョウセンハマグリなどは遠洋性の貝類、サザエも巨大で、いずれも5 m以上の深い海に生息する貝類である。これらが遺物と共に貝塚に一括して入っているということは、貝類が単に打ち上げられて投棄されたものではなく、沖合で採取してきたことを示していると見られる。このことは、中世前期の南張地区で、現在の「海女」「海士」につながる漁業が行われていたことを示唆するのではないだろうか。

南張貝塚ではじめて明確に確認された貝塚は、当地の中世漁業を知る上で、極めて重要なものといえ

よう。

24-2区で確認された落ち込み地形に関しては、後に改めて検討する。

b 遺物

出土遺物のなかでは、24-1・2区から見つかった製塩用土釜が注目できる。製塩用土釜は、志摩半島では立神高岡製塩跡などでその存在が知られている⁽¹⁾が、南張貝塚では初めてである。この土器が見つかったことにより、当地で鎌倉時代頃に製塩業が営なまれていたことがわかった。

この他には、24-1区で出土した土師器鍋が注目である。これは尾張・三河産の内耳鍋と見られる。尾張・三河産の内耳鍋は、志摩半島にあたる志摩市阿児町西殿遺跡⁽²⁾や志摩市磯部町侍岡中世墓⁽³⁾などのほか、尾鷲市向井遺跡⁽⁴⁾からも出土している。また、近世以降は志摩半島地域に尾張・三河産焙烙が点々と搬入されている状況が見いだされつつある⁽⁵⁾。

熊野灘沿岸部には、中世前期以来尾張・三河産の陶器類が数多く出土していることから、当該地の土師器が出土することはさほど驚きではないともいえる。しかし、土師器が地域外に搬出されることは珍しい。南張貝塚の内耳鍋は、尾張・三河地域との交流が中世に至っても活発であったことを物語っているといえよう。

c 南張貝塚の遺跡状況

発掘調査で判明した興味深いことに、当地の遺跡遺存状況がある。

今回の発掘調査は、現況道路に埋管するための工事に伴っている。したがって、発掘調査したのは道路部分だけである。現況道路は屋敷地よりも一段（1 m内外）高い位置にある。そのため、発掘調査前は1 m程度の盛土を除去した後に遺構面が現れる想定していた。ところが、実際の遺構面は、浅いところでは路面下30cmで確認された。明らかに現況の屋敷地よりも高い位置にある。

このことから、南張地区の屋敷地は、元々の地盤を下げるようにして造成されているものが多いと見られる。道路の部分が高いのは暴風・防砂の意味も

兼ね備えていると考えられるが、それにしてもこの確認は意外であった。

2 南張地区の地形環境

南張集落全体に調査坑を設けることになったため、地点ごとの層序を見ることで、南張集落（南張貝塚）の地形環境を一定程度復元できる要素が揃ったといえる。ここでは、発掘調査資料をベースに、関連する資料も合わせながら南張集落の地形環境復元を試みる。

a 発掘調査資料による砂堆と後背湿地の確認

現在の南張集落は、概ね標高4～5m程度の平坦な地形となっている。しかし発掘調査により、当地の基本地形は決して均一な平坦面をなしていないことが判明した。

まず、当地の基本となる層は黄褐色系細砂層である（第III章）。この層は極めて均質な層であり、海成砂と判断して間違いないものと考えられる。つまり南張集落の基盤は、海性砂の堆積＝砂堆（浜堤

帯）によって形成されていると判断できる。

この層は、23-3区や23-7区のように路面下30cm程度で検出される場所がある一方、24-2区北部や23-4・6区のように、路面から1m以上下で確認される地点もある。とくに24-2区北部のS Z 8とした部分では、路面下1.8mほども下がる。S Z 8ほどではないにしても、現路面下1m内外の高低差を有する地点を調査地點はいくつか見られる。黄灰細砂層が、路面下50cm程度未満で見られる地点と、路面下80cm以上の深度となる地点を見ていくと、第6図のような分布となる。

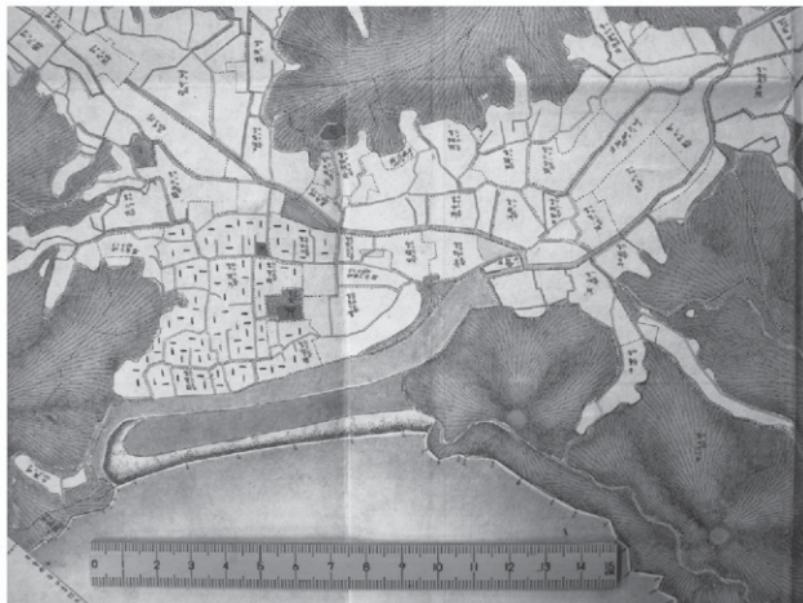
以上のことから、中世段階の南張地内は2m弱程度の高低差を有した地形が広がっていたと指摘できる。標高の高い地点は砂堆の上面部、低い部分は後背湿地（ラグーン）にあたる部分と見てよいであろう。第6図には、黄灰細砂層の確認レベルを基に、砂堆ラグーンの状況も復元してみた。砂堆は、南張集落内に3列、南張川を挟んだ対岸にもう一列の、合計4列があると考えられる。北から順に砂堆Ⅰ～



第6図 黄灰細砂層の深度と砂堆の復元



第7図 「南張村絵図」(近世前期)



第8図 「志摩国英虞郡浜島村大字南張絵図」(明治22年、三重県蔵)



第9図 近世段階の南張村状況想定図

IVとする。

b 中世南張地区（南張貝塚）の地形復元

つぎに、当地を表した地図類を見よう。まず、南張区が所蔵する「南張村絵図」（以下、絵図A）がある（第7図）。絵図Aを掲載する『浜島町史』⁽⁶⁾によると、徳林寺は寺伝によれば享保19（1734）年に現在地に移動したとしているという。絵図Aには徳林寺の記載が無い。したがってそれ以前の成立ということになり、江戸時代前期の様子を伝えていると考えられる⁽⁷⁾。

絵図Aには、南張集落内に東西方向の道が大きく2本記載されているが、南側の道（以下、南道）は短く、北側の道（以下、北道）のみ太く通じていることが知れる。北道沿いに楠之宮（現八柱神社）と寺（徳寿庵）が見られ、この道が集落内で最も中心となる道であると考えられる。なお、南道から北道へのアクセスは集落西側に見られるが、ここでは一度西側へ大きく迂回して北道へと接続していることに注目したい。

2点目の図として、「志摩国英虞郡浜島村大字南張全図」（三重県蔵）を挙げる（第8図、以下、「絵図B」）。絵図Bは明治22年9月20日の記録があり、この時期一齊に作成された村絵図のひとつである。

現況小字の基礎となっているものであり、道や川・水路の記載も丁寧である。絵図Bに記載されている道路・寺社・墓地などを現況図に入れ込んだのが第8図である。

絵図Bでは、絵図Aに記載されていた北道・南道が見える。また、集落の中程にもいくつかの道が見えるが、北道のように筋は通っていない。

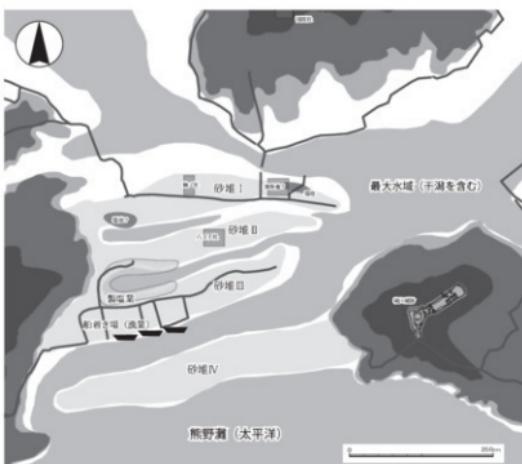
以上の絵図A・Bのほか、昭和47年に浜島町（当時）が作成した地形図も用い、中世段階の南張地区を考えよう。第9図には、絵図Bに記載されている道を今の地図に落とし、小字や道の状況を基に江戸時代以前の水域も想定して入れている。また、ここには第6図で検討した砂堆とラグーンの想定位置も入れ込んだ。南張地区の北部

は、東から南張川、西から湯夫川が流れ込み、集落の東方で合流し海へと注ぐ。現在の徳林寺が乗る丘陵と南張集落の砂堆部との間は狭く、湯夫川の水流は滞り気味だったと考えられる。実際、この場所には「大池」の字名も残っている。

南張集落の東方は、現在の標高2m弱の水田地帯が広がる。ここには「中島」や「飛州」といった小字が残っており、やはり灌漑域であったと考えられる。

集落は、東西に延びる3本の砂堆で構成されていくと見られる。南道と北道の通る位置が砂堆の南北端にあたり、中央に小規模な砂堆が通っていると見られる。絵図Aに見られた、南道から北道へのアクセスが西側で大きく迂回するのは、その間のラグーンを避けたものと考えられる。中央の砂堆上に貫通する東西道が見られないのは、集落地としてはあまり利用されていなかったためと考えられる。

以上の想定を基に、中世段階の南張集落（南張貝塚）を復元してみたのが第10図である。砂堆を北からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳとした。砂堆間のラグーンは狭く、常に滯水していたとは考えにくい。しかしその環境は、入り浜式の製塩業を営むのには適している。砂堆Ⅲにて貝塚と製塩用土釜が出土しているのは、そのような背景を考えることができよう。



第10図 中世の南張地区景観復元概略図

砂堆Ⅰには、南張集落の中心部があったと考えられる。楠之社と徳寿庵がどこまで古く遡るのは分からぬが、その全身施設は中世前期頃までこの付近にあったのではないかだろうか。

砂堆Ⅱは集落城としては利用されず、専ら八王子社の敷地として利用されたのではないかと考えられる。この付近の現境地割りが、砂堆Ⅰ・Ⅲに比べて直線的なのは、八王子社の地割りに合わせて後発的に成立したからではないかと推察する。

砂堆Ⅲは南張川に面するとともに、集落地としては最も海寄りの砂堆である。生業としての漁業を行う上で中心となった場ではないかと考えられる。

砂堆Ⅳは南張川を挟んで砂堆Ⅲの南部にある。この砂堆は当地の防波堤の役目を果たしている。居住域とは考えにくい。

以上、南張地区（南張貝塚）の中世段階での景観を大雑把ながら復元してみた。地形を巧みに利用した生活環境を考えられよう。

3 総括～南張貝塚の意義～

南張地区は、平野部の少ない志摩市浜島町内にあって、比較的平地の多い場所である。そのため、浜島町内のなかでは農業が盛んな地域として認識されている。そのこと自体は何ら間違ひではないのだろうが、それを踏まえたうえで発掘調査の成果を見ると、南張地区はふたつの大きな歴史を経てきたことが認識できる。

まずは、中世までの南張地区に関してである。発掘調査からは、南張地区では遠洋部に生息しているアワビ・サザエなどの貝類を収穫していたとともに、集落近隣では製塩業も営まれていた。砂堆やラグーンの存在、中世後期の尾張三河産土師器の出土からは、活発な舟運も想定できる。このように、中世の南張地区は、海に大きく依拠した生業をしていたことが明らかになった。

もう一つは、近世以降の南張地区に関してである。

前項で検討したように、南張集落の北部一帯はラグーンが広がっていたと考えられる。それが、近世前期の絵図（絵図A）以降、入り海の表記は見られない。これは、ラグーンの干拓による新田開発が進展した結果と見られる。実際、絵図Aには「新田」の文字が湯川・南張川の深部に見られる。現在では南張集落近隣にまで水田が広がっているので、このような新田開発は江戸時代から明治まで漸次進められてきたものと考えられる。

以上のような経過をたどると、南張地区は漁業集落から、次第に農業集落へとシフト変換をしてきたことが推察できる。南張地区に見られるこのような動向は、地域や場所によって少しづつ異なるものの、中世から近世への過渡期において各地で見られる状況の一例として注目できるのである。

南張集落のほぼ全域を覆う南張貝塚。その解明は、集落の持つ歴史的動向、集落のアイデンティティーを知るための素材としても、極めて有効であるといえる。

【註】

- (1)三重県埋蔵文化財センター『立神高岡製塩遺跡』(2006年)
- (2)三重県埋蔵文化財センター『西殿遺跡発掘調査報告』(1992年)
- (3)磯部町教育委員会『侍岡中世墓発掘調査報告』(1982年)
- (4)尾鷲市教育委員会『向井遺跡発掘調査報告』(1981年)
- (5)伊藤裕像『中世伊勢・志摩・東紀伊における内耳鍋資料』(『中世土器研究』第70号、1993年)
- (6)『浜島町史』(浜島町、1989年)
- (7)三重県埋蔵文化財センター『南張貝塚(第1、2、3次)発掘調査報告』(2010年)では、当絵図を「江戸時代後期」としているが、徳林寺の寺伝を根拠にすれば「江戸時代前期」と認識できる。

【参考文献】

- ・平松令三監修『三重県の地名』(日本歴史地名大系24、平凡社、1983年)
- ・三重県『三重県史』資料編考古2 (1992年)

写 真 図 版



南張川と南張集落（西から） 平成25年5月撮影

写真図版 1 調査区 第4次 (二三一~五四区)



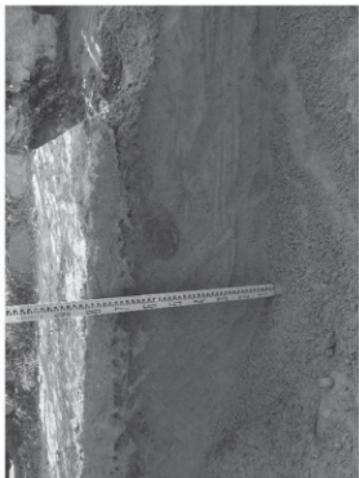
23-2区(西から)



23-4区(西から)



23-1区(東から)



23-3区(東から)

写真図版 2 調査区 第4次(二三・五・六区)・第5次(二四・一区)



23-6区(南から)



24-1区(東から)



23-5区(東から)



24-1区(西から)



24-1区貝層SZ7（南西から）



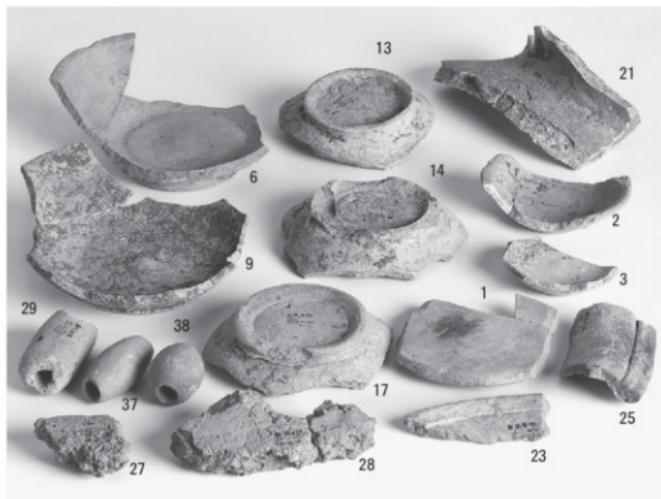
24-1区貝層SZ7（南東から）



24-2区（南から）



24-2区落ち込みSZ8（北東から）



報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告347

南張貝塚（第4・5次）発掘調査報告

2014（平成26）年2月

印刷 光出版印刷株式会社

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター